

篠崎ポンプ所界隈の今

石造り道標

以前、「小松川界隈の今昔」で京葉道路谷河内の交差点付近にあった俳句の刻まれた珍しい道標を紹介しました（水声一一〇号）。

その中で、道路工事で降行方向がわからなくなったと書きましたが、保存されていることが分かりました。都営新宿線篠崎駅に程近い、篠崎第四小学校の校庭の片隅に置かれています。上部には方向を示す手指が陽刻してあり、下部には地名と距離を示す俳句が彫られています。かなりくずれており判読は困難です。以前紹介したときの資料では、



▲ 石造道標

「川原まで四十八丁稲の秋」とありました。しかし小学校にある教育委員会の掲示には「河原迄□九丁稲の花」とあります。

造立は安政三年（一八五六年）秋之初とあります。俳句好きの探訪会メンバーも、やはり「稲の花」が相応しいという意見です。

河原とは、江戸川水門近辺の行徳側にあった河原村のことで、江戸川の渡し場がありました。谷河内からは河原道と呼ばれた街道を通ってそこに至ります。距離も四十八丁では五キロほどとなり少し過大です。多少屈曲のある、昔の街道筋とすれば二十九丁とすればふさわしい距離です。江戸時代の実りの秋を詠み込んだ見事な（と私には思える）一句です。篠崎地区は昭和の半ばまで一面の田んぼ風景があったのです。それでは河原近辺から篠崎ポンプ所界隈を散策します。



▲ 昭和7年地図

江戸川放水路（行徳可動堰）

篠崎駅から十分も歩けば江戸川土手に立つことができます。右の地図は昭和七年（一九三二年）の地図です。左には旧江戸川、右側には分岐した江戸川放水路が見えています。二つの水路に挟まれた先端が河原で、少し下った旧江戸川右岸が篠崎ポンプ所

の位置になります。

江戸川放水路は大正五年から開削が進められ、大正八年（一九一九年）には竣工しています。しかし地図を見ると工事半ばの様に見えます。疑問に思い、河川事務所地図を提示して問い合わせたところ、「放水路流頭部は河川敷ですが、すぐ左下の土手が切れています。大水の時河川敷にあふれ出した水は行徳橋の下の固定堰を超えて放流された」とのことでした。その後、昭和二十二年のカスリーン台風の影響から計画洪水水量が大幅に増えて、効率よく水を流すように川床を掘り下げたのです。これにあわせて、平常時の塩水遡上防止と洪水時には効率よく排水するため、固定堰から可動堰に改良されました。

このため河川敷も今は満々と水をたたえています。この状態をいつも見ていたもので、筆者は江戸川放水路は常時流れているものと思ひ込んでいました。現在でも行徳可動堰を開けて放流するのは年に一、二回の大水の時だけです。昭和四十年の河川法の改正により江戸川放水路は正式名として江戸川となりましたが、江戸川放水路の方が馴染みもあり、通称もよいようです。

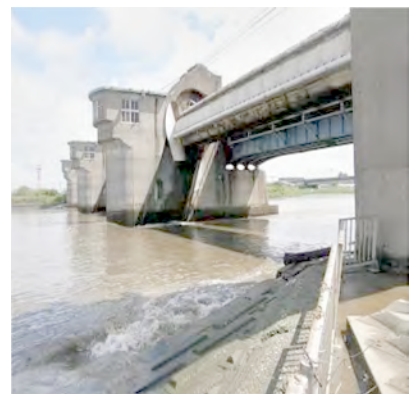
江戸川水閘門（すいこうもん）

一方の旧江戸川への分岐には、江戸川水閘門（江戸川水門十閘門）があります。

江戸川水閘門は旧江戸川を仕切る水門と船を航行させるための閘門からできています。

昭和十一年工事に着手、戦時中の昭和十八年に竣工しています。江戸川水門が造られる以前は、塩水の影響が上流十七キロ（流山橋付近）まで及んでいたといわれています。

水門は五門あり、そのうち二門は二枚扉で越流放流が出来るようになっています。ほか三門のもぐり放流



▲ 行徳可動堰の放流



▲ 江戸川水門

と合わせて、塩水の遡上防止と水位安定を図っています。この水門の操作によって、上流の金町浄水場など複数の取水施設が安定した取水・処理が可能となり、首都圏内一千万人の生活用水に利用されています。

行徳常夜灯公園

行徳橋から旧江戸川左岸を少し下れば本行徳の街並みです。旧江戸川沿いに常夜灯公園があります。かつての行徳の船着き場で「新河岸」と呼ばれ、江戸時代から舟運のターミナルとして賑わったところです。ここには常夜灯が昔の儘の姿で保存されています。常夜灯には「日本橋蔵屋敷」など成田山講中が「文化九年（一八二二年）建立」と彫られ、成田山参詣の航路の安全を祈願して奉納されたものです。

津として栄えた理由は、江戸時代初期までさかのぼります。徳川家康が江戸入府したときには、行徳の遠浅の海には既に「行徳七浜」と呼ばれる塩田がありました。塩と言えば、赤穂をはじめとした瀬戸内の塩田が有名で、生産量では行徳塩ははるかに及びませんでした。

幕府は「塩の儀は御軍用第一のこと、御領地第一の宝」（塩浜由緒書）として保護・育成しました。行徳塩浜は関東以北では最大規模になりました。江東区の小名木川はもとも江戸時代初期に塩の輸送のために開削されたもので、行徳塩浜で生産された塩は新川、小名木川を経て江戸城へ納められました。

時代が下ると東北の乾物や雑穀、米などの物資が水路、陸路通って行徳に集まりまし



▲ 常夜灯公園から篠崎ポンプ所を望む



▲ 高さ 4.5 m 常夜灯



▲ 江戸川閘門

た。さらに、成田の新勝寺、香取神宮などの参詣人の往復でも賑わいました。江戸日本橋小網町（行徳河岸）から行徳新河岸にいたる水路は三里八丁（約十二・六キロ）。陸路よりはるかに早く楽だったのです。当時の旅人の一人渡辺畢山の紀行文（四州真景）から抜粋します。

六月廿九日「小網町三丁目行徳河岸加田家長左衛門にて船を買。船賃 かり切五百文 壺人にて八六十四文 三又より逆井、中川御番所、舟堀、新川、利根川。行徳 天晴熱甚」行徳船を貸し切って、定番のコースで行徳についたころには酷暑だったようです。利根川とは現在の旧江戸川のことです。

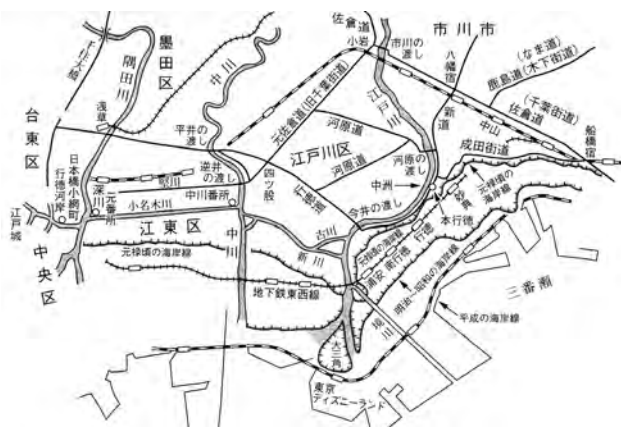
もうひとつ藤沢周平「小川の辺」より。

「新河岸は、寛永九年に行徳船が公許になり、日本橋小網町から小名木川を通って新河岸に達する、水路三里八丁の舟便がひらかれると、房総、常陸に旅する者の駅路として、急ににぎやかになった。商いの店がふえ、旅籠、茶店が軒を並べ、とくに正月、五月、九月の三力月は、成田不動尊に参詣する人々で混雑する。」江戸名所図会の世界です。公許の行徳船の運航は明六つから暮六つで、常夜灯を目標にしての航行は少なかつたと思われませんが、その他の夜船も江戸川を盛んに通行していましたので、常夜灯はその目印となつたでしょう。

「江戸名所図会」には左下江戸川べりに常夜灯が置かれ、船着き場の前は広小路となっており、荷役の人馬の様子、行き交う旅人が描かれています。船着き場から街道（図会には八幡・船橋街道とある）に出ると突き当りに「笹屋うどん店」が見えます。行徳船の客だけでなく、今井の渡しを渡る旅人も必ずこの前を通りました。十返舎一九「金草鞋」（かねのわらじ）などにも描かれ、庶民の観光ガイドには必ず登



▲ 江戸名所図会 行徳船場



▲ 江戸～行徳への舟運ルート

場する、うどん屋です。

「さあ船が出ますとうどんやへ知らせ」と古川柳にあるように旅人の多くが立ち寄る店だったようです。

当時、対岸の篠崎方面からもその河岸の賑わい、往来する行徳船や荷船、夜ともなれば常夜灯のチラチラとした灯影が見えたに違いありません。

明治十年（一八七七年）には、外輪式蒸気船通運丸が深川高橋から行徳河岸まで就航し、明治十二年、行徳船は廃止となりました。

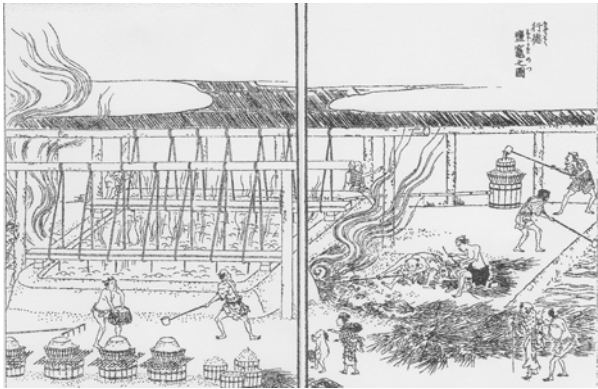
通運丸は明治の利根川水系の定期貨客船で、廃業までに四十隻ほどつくられたそうです。

しかし新たな輸送の担い手、鉄道の発達により徐々に衰退し、昭和の初めには姿を消していきました。

行徳の製塩

行徳の製塩の歴史は古く、一説では農民が、上総の五井に製塩の出稼ぎに行つて、覚えてきたといわれています。北条氏の支配の時代には、塩年貢として行徳から船に乗せ小田原まで運んでいました。北条氏と武田信玄との戦で有名な甲州への塩止めは、この行徳塩だといわれています。

行徳の製塩法は、堤防で囲んだ塩田に砂を敷き海水を導きいれて天日乾燥をします（入浜式）。この潮の結晶のついた砂を集めてザルに入れ更に上から海水を注ぎ、下に置いた桶に凝縮海水として取り出しました（箆取法）。こうして取り出された濃い塩水を鹹水（かん



▲ 行徳塩釜の図



▲ 笹家うどん店跡

すい）と呼び、煮つめて塩を生成しました。この煮詰める容器を塩竈（しおがま）とよびます。

右の絵で左下では箆取法による海水濃縮が行われています。右上の人物は塩竈に鹹水を補給している様です。数十畳もある竈（かまど）が塩竈です。

使用された箆はほとんどが篠崎で作られたものだったそうです。篠崎の地名は「砂州上で篠竹の生い茂った土地」が謂れだそうです。材料の豊富にある篠崎の箆づくりは農閑期に作られる名産品でした。丈夫で二十年は持つと云われる篠崎の箆は、現在も伝統工芸として受け継がれています。燃料には火力の強い松葉が主につかわれました。

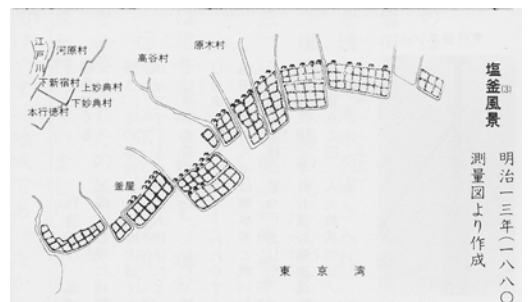
行徳一帯の海岸は遠浅で、製塩には適しており、行徳の農民の夏の副業だったのです。下の図には行徳の塩田とその上に転々と塩竈の小屋が描かれています。小屋から立ち上る煙は篠崎からもよく見えた事でしょう。

突き固めた土手で囲われた塩田は海岸に作られ、特に水害には弱く、たびたび被害を受けますが、その都度復興して大正の時代まで至りました。

大正六年の大津波

明治四十三年の大洪水では関東平野一面が水浸しとなり、これが荒川放水路や江戸川放水路開削の契機となりました。さらに大正六年九月三十日から十月一日にかけて関東を横断した強烈な台風は、東京湾で低気圧により海水面が盛り上がり、遠浅の行徳沖に近づくにしたがい、大潮の満潮時ともかさなりそそり立った高波は高さ三メートルを超えて、押し寄せました。

家屋も流され多数の死者を出したこの災害で、行徳の塩田は壊滅的打撃を受け、荒浜となりました。その後塩田は大正十年に至っても回復できず、昭和四年の製塩地整理によつて数百年の歴史持つ行徳の製塩は終焉しました。昭和三十九年から行徳の区画整理が始まり、遠浅の海も広範囲に埋め立てられました。現在行徳は市川市に含まれますが、昔の塩田を偲ばせるものが残っています。塩浜、塩焼という地名がそれです。



▲ 塩竈風景

江戸川清掃工場

さらに旧江戸川を下り、今井橋を渡れば江戸川区です。旧江戸川右岸を遡り篠崎ポンプ所へ向かう途中に江戸川清掃工場があります。

平成十二年に清掃事業が東京都から二十三区へ移管されました。その際、ゴミの収集・運搬は各区が実施することとしましたが、ゴミの中間処理（焼却や破砕）は処理施設がない区もあり、効率的に共同処理を行うなどの理由から、地方自治法に基づき設置されたのが「東京二十三区清掃一部事務組合」です。この長い名称を略して「清掃一組」といい、特別地方公共団体です。江戸川清掃工場も「清掃一組」が運営・管理する二十の清掃工場のうちのひとつです。

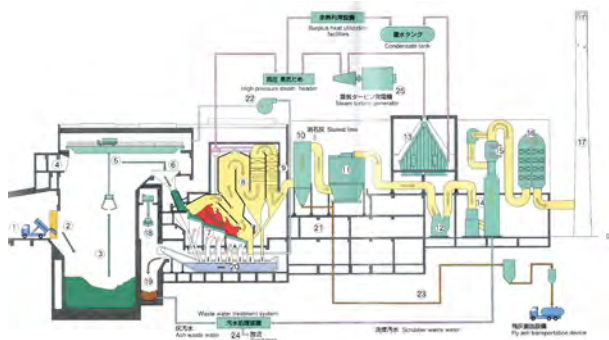
江戸川清掃工場には篠崎ポンプ所の上流ポンプ所（細田、小岩ポンプ所）からも「しさ」を搬入して焼却をお願いしています。

プラント概略は左図の通りです。収集車により搬入されたゴミは収集車ごと計量機にかけてゴミの重量を量り、ごみバンクと呼ぶ巨大なピットに入れます。さらにごみクレーンにより焼却炉に投入されます。

焼却炉は火格子焼却式でごみは炉内を進みながら、乾燥、焼却します。下水道局の流動床焼却とは違います。廃熱で蒸気を発生させ、蒸気タービン発電機を回します。この発電で場内のすべての電力を賄いますが、焼却炉のメンテ期間は買電とのことです。この廃熱の一部は隣接する「区立くつろぎの家」に供給され、冷暖房、お風呂などに利用されています。焼却灰は溶融スラグ化して土木資材として利用しています。平成二十三年の東日本大震



▲ ゴミクレーンの爪



▲ 清掃工場

本州製紙工場事件

災以降は焼却灰などからの放射線量、放射線量の測定も行っています。焼却炉、廃熱利用、焼却灰のスラグ化、放射線量測定など、ごみの減量化、再利用は下水道局の発生汚泥のそれと共通する努力や苦労があるようです。

篠崎ポンプ所のお隣が王子マテリアの江戸川工場です。工場にそった篠崎街道にはマテリア裏門と正門の二つのバス停があるほどの大きな敷地です。ここに初めに製紙工場が出来たのは大正十一年（一九二二年）の富士製紙です。その後、初代の王子製紙に合併、戦後本州製紙が継承、さらに一九九六年新王子製紙に合併。そして現在の王子マテリア江戸川工場となっています。本州製紙敷地の下部には多くの社宅が立っていますが、その下部一帯を下水道局が取得して篠崎ポンプ所が建設されました。工場では江戸川の水を使用し、処理して再び江戸川に戻していますが、その排水機場がポンプ所の敷地内に残っており現在も働いています。さて、事件は昭和三十三年、本州製紙時代に起こりました。少し長くなりますが浦安市のホームページから引用します。



▲ 昭和 35 年地図

「昭和三十三年四月七日、旧江戸川の水が本州製紙江戸川工場からの排水で黒く濁り、浦安沿岸から葛西沖にかけて海水が変色、魚介類の大量死滅が見られました。驚いた漁民たちは直ちに会社側との折衝や関係官庁への取り締まり陳情を開始。しかし、問題解決のきざしはなく、被害は広がり続けました。業を煮やした漁民代表八百人は六月十日、国会と都庁に陳情を行い、帰路、工場に向かいましたが、工場側は面会に応じないばかりか、監督官庁からだされている中止勧告を無視して操業を続行。

このため漁民はついに工場内に乱入、工場側の要請した機動隊と衝突。漁民から重軽傷者百五人、逮捕者八人、その他負傷者三十六人を出す大乱闘事件に発展しました。」この事件をきっかけに初の公害法となる水質三法（水質保全法、工場排水規制法）が

成立しますが、その後の海面埋め立てなどにより、漁業の環境は急激に悪化し、水産物の水揚げは年々減少していきました。

浦安の漁業従事者は漁業の将来に不安を持つようになり、昭和三十七年に漁業権の一部放棄。その後も東京湾の汚染が進み、昭和四十六年みはついに漁業権の全面放棄に至りました。

親水緑道

篠崎ポンプ所正門脇にも小さな排水機場があります。東井堀親水緑道と篠田堀親水緑道を流れる水を合わせて、旧江戸川へ放流する前野ポンプ所です。篠田堀は王子マテリアの工場脇を流れ、東井堀親水緑道は谷河内交差点付近から前野ポンプ所まで流下してきます。その一部は篠崎ポンプ所への通勤路にもなっています。江戸川区にはかつて多くの用水が流れていましたが、農業の撤退・宅地化の中で、灌漑用水としての役目を終え、汚れドブ化していました。現在、下水道の普及と相まって一部はうめたてられ道路となり、一部は親水の流れとして整備されました。篠崎ポンプ所の正門脇を終点とするこの二筋の流れもその一部です。



▲ 篠田堀緑道公園

小合溜井（こあいためい）

江戸時代からこの地域には用水路が縦横に走っていました。その水源が小合溜井（現、水元公園）で、小合村（現、葛飾区）に多くかかるので名付けられました。小合溜井を流れ出た水は上下之割用水と呼ぶ大用水となり上之割＝葛飾区域、下之割＝江戸川区の灌漑用水となりました。（現在、灌漑用水の役目を終えた小合溜の水は中川に戻されている。）

上下之割用水は新宿付近で小岩用水と東井堀に分かれて南流し、小岩用水は上、中、下小岩を潤して江戸川に注ぎ、東井堀は細田村、松本、鹿骨、谷河内、上鎌田村の五村を経て前野から江戸川に注いでいました。このルートは篠崎ポンプ所から小岩、細田、新宿ポンプ所への道筋であり職員にとっても馴染みのあるコースです。奥戸街道と鹿本通りの交差点には「東井堀」の名前が残っています。

現在の水源は両緑道とも篠崎駅付近の江戸川から取水する本郷用水からの分水となっています。この流れは幅一、二メートル、流量は数十リットル毎秒ほどのごく穏やかな流れです。所々にミニポンプを設け、揚水しています。コイや江戸川から入る小魚、エビなどが住む水辺には冬季にはカルガモが住民から



▲ かつての篠崎地区の用水路



▲ 小合溜

エサをねだる可愛らしい光景も見られます。住民の憩いの散策コースとなり、子供たちにとっても絶好の遊び場となっています。

（文責 高橋）

取材余話

篠崎ポンプ所界限は一部の工場を除けば昭和三十年代まではぼ田圃一面といってよい土地柄です。この界限の今昔について、何から書き始めるか考えあぐねていました。

そんな時、偶然手にした資料で、俳句の刻まれた石造り道標が残されている事がわかりました。「谷河内の河原道石造道標」と呼ばれ、江戸川区の歴史資料にも登録されています。小松川界限（水声一〇号）では亀井鳴瀬さんの「葛飾風物詩」より引用して行方不明と書きました。道路工事のため近隣に一時移転し、その後小学校で保存されたため、その間の所在が判然としなかったようです。

この道標は篠崎駅の近くの小学校にあるので、ここを起点にしてポンプ所界限に接近できるのではないかと。私なりの粗筋が見えてきました。

篠崎ポンプ所の屋上から常夜灯が望め、東西線の走るのが確認できました。思いのほか行徳は近く、まさに界限でした。ポンプ所の脇を流れる緑道公園は江戸から続く東井堀用水の末裔で、現在の水元公園の小合溜から滔々と流れていました。

資料を渉猟して生まれてくる疑問の答えを探して歩くのは楽しいものです。河川事務所、市川歴史博物館、行徳の街、葛飾区郷土博物館、江戸川清掃工場など、資料館の学芸員やボランティアの方に尋ねることで面白い発見もあり。足を運ばなければわからないものも多いのです。

参考文献（本文で明記したものを除く）

- 川の地図辞典、
- 行徳郷土史事典
- 江戸川図誌
- 江戸川河口だより
- 東京都市地図
- 行徳塩づくり
- 江戸川区の文化財
- 広報えどがわ
- 江戸川清掃工場パンフレット